

とけ合って程よい風味がえられる。七草粥も関東風の雑煮と酒につかれた胃に合うものである。今年  
は市販のスズシロ（大根）、ハクサイ、ホーレンソウばかりでなく、春の野に出で若菜を摘み、ナズ  
ナ、ゴギョウ、ハコベラを入れてみた。野草のほろにがさが躰全体にしみわたると、なぜか万葉人の  
風情がしのばれるのも不思議である。

暮れから出まわる独活が安くなる頃、私はウドのキンピラを作る。千切りにしたウドを油で炒める  
だけでできあがり。酸の物で食べるウドもよいが、ウドのキンピラも酒の肴に格別である。シジミヤ  
アサリのみそ汁は、酔い覚ましに効果があるが、アサリのバター炒めは私のレパートリーの一つであ  
る。バターをおとした支那ナベにアサリを入れてまぶし、酒を入れむした後、開いた貝に荒挽きのブ  
ラックペッパーをふりかけてできあがり。ふしぎにあきのこない食物である。

暑さ寒さも彼岸までといわれるように彌生から卯月にかけては野山に山菜が萌え出るが、それらに  
ついては旧号（お茶の水地理 18、武蔵野の山菜）でふれたので割愛することに。目に青葉、山不  
如帰、初鰹といわれるように 5 月はかつおの季節である。かつおは本来、土佐沖に回遊してきた時が、  
旬だといわれるが、私はそれが待ちきれず、5 月の初めからかつおのたたきを作る。かつおのたたき  
は、いわゆる土佐作りと呼ばれるものである。三枚におろしたかつおの半身を半分に切り、火にあぶ  
ったものを氷水につけた後、酸でしめてたたくのである。厚手に切ったタタキにネギ、ショウガ、レ  
モン、ニンニク等をふりかけて食べると、ビールもおいしくなる季節でもあり、ほんとうに生きてい  
てよかったという感慨にひたることができる。かつおは本来木炭であぶるのが最適といわれているが、  
団地住まい故、略式ですることにならざるをえない。残りのかつおでアラ煮を作ってみたが、これは  
うまいかなかった。鮪の角煮は普通にできるがマグロとハマチの荒煮はどうしても飲屋で出される  
域に達していない。今後とも工夫を重ねるつもりである。ともあれ、日本料理は、計量ではなくして、  
色と香りで勝負して頂きたいというのが、一主夫の感想である。

## 猫 の 子 育 て

貝 山 久 子

オババちゃんは向いの鈴木家の大きな物置をねぐらにしていた黒白まだらの牝猫で、年のころは定  
かでない。鈴木家の当主はNHK勤めで、10年ほど地方局まわりをされていたので、広大な邸を2家  
族に貸しておられたが、その1軒の石山夫人が猫好きで面倒をみておられたらしい。オババちゃん  
というのは、その猫が隣の田中家の母親猫ミイコの母親であるところから我家でつけた名前  
で、石山夫人はその顔つきから「ボンコ」と呼ばれていたことがわかった。一昨年の春鈴木氏が地方局まわり  
に終符をうって東京に戻られ、昨年の春その古い大きな邸はとりこわされて新築がはじまった。こ  
うしてオババちゃんは一挙にすみかと飼主（？）の両方を失うはめになったのであるが、しかもその時  
オババちゃんは妊娠していたのである。

従来オババちゃんは主として石山家、従として田中家と我家で御飯にありついていたが、石山家が  
川口の団地に越されたあとはオズオズとしかし頻りに我家に来るようになった。私はオババちゃんの

地面につきそうなお腹をみながら、我家以外のどこかでお産することを祈るばかりであったが、4月はじめの生あたたかい春の夜、玄関脇の縁の下あたりでビイビイという仔猫のなき声をする。やんぬるかな　　と思ったが後の祭である。ところが間もなくその声はハタと止んでしまった。どこか居心地の好いところを見つけたのかと思っていた矢先、何と玄関の天井裏で複数の仔猫のなき声をする。しかも日がたつ中になき声は次第に大きく、ホコリや枯葉が落ちて来るようになった。オババちゃんは無表情な顔で御飯時になるとあらわれ、つつましくかき食べ終ると姿を消してしまう。ある時ソツとつけて行ってオババちゃんが裏の白取家との境の塀を足場にして、我家の屋根にとびうつり、屋根と壁のすき間から屋根裏に入るところを見届けてしまった。半月たち1月たつてもオババちゃんは仔猫をおろす気配がない。私は仔猫の体重がオババちゃんのアゴの力を上廻ったらどうしようかと気が気でない。その中仔猫はますます大きくなって天井裏をさかんに移動するようになり、私をヤキモキさせた。そうして5月末の日曜日の朝、私はとうとう裏庭の八つ手の下にまるくよりそっている仔猫を発見したのである。ヤッタヤッタと私はオババちゃんの愛嬌のある顔を眺め拍手を送った。私が大声を挙げ、娘共がドッとかけつけ仔猫は黒白ブチが1、黒が2と判明した。しかし人間共のさわざがあまり大きかったせいかオババちゃんは仔猫を鈴木家の木材をおくっているキャンパスの下にくわえこんでしまったが、半月もすると3匹従えて我家にあらわれるようになった。娘共は早速アニメ漫画からとって大介、甲児、ヒカルと命名し、さかんに餌でおびきよせて、とうとう家の中に連れこむことに成功した。こうしてこの仔猫達は我家の準家族として家中を駆け廻るようになったのであるが、7月に甲児が胃腸をこわし、病院に連れて行ったが手おくれで死に、牡とばかり思っていた大介は何と牝であることが判明して止むを得ず太子という変な名前になり、ヒカルはピカというニックネームで呼ばれるようになった。オババちゃんは育児期間中は実によく面倒を見、時々どこからか大きなエビフライや鮭の頭などをもって来て食べさせていたが、今は飼猫に出世(?)した我子達をみても別に羨むでもなく、相変らずオズオズとやって来ては、太子やピカの食べ残しをしとやかに食べて出ていってしまう。

## わたしの歴史地理

柴田孝夫

秩父の二山ばかり奥に両神村薄というところがある。荒川の支流の赤平川の又支流の薄川の流域にあたる。こゝは中世の武士団の武蔵七党のうち丹党に属する薄氏の本拠である。ひどく奥まったところであるから山間の僻地であろうと思っていたが薄川の段丘上には桑里水田などもあって意外にひろけたところである。こゝに無住で荒れてはいるものの立派な薬師堂があって埼玉県保護建造物になっている。室町時代の建築だという。こゝが薄氏の館趾だと思われる。住職がいなかったからこれを預っている人を土地で尋ねた。両神山の中腹に金剛院という寺があってそこの法印だという。せまい山道を車で上れるかどうか危みながら砂利の急坂を登りつめた。なるほど二三軒の集落がある。もう日は暮れかゝっているのに人影がない。「金剛院さん」と大きな声で二声三声呼んだ。山の上の方から声